

小田切秀雄と「歴史社会学」的方法

Yamanaka, Hideki / 山中, 秀樹

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

78

(開始ページ / Start Page)

24

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

2008-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010169>

小田切秀雄と「歴史社会学」的方法

山中 秀樹

はじめに

一九三〇年代中ごろ、後に「歴史社会学派」と呼ばれる国文学研究者たちが登場した。「歴史社会学派」とは、日本文学研究の一つの方法論、文学作品を歴史的・社会的条件、地盤の中でとらえようとする立場のことである。その代表的な研究者は、法政大学教授であった近藤忠義である。彼が後に『日本文學原論』（一九三七・二、同文書院）としてまとめた諸論考、主に一九三三年から三十七年にかけて『國文學誌要』（法政大学）などにたて続けに発表した論文を中心とし、またそれに共鳴し、協調した一連の少壮学者たちの仕事をさして言った。

しかし、それが文学研究の「学派」として明確に存在していたのかどうか、存在していたとすればそのメンバーはだれで、いつからいつまで存在していたのか、などと問われれば答えに

窮する。ただはっきりと言えることは、「歴史社会学派」が、それまでの文献学的国文学研究に異を唱えた岡崎義恵『日本文藝學』（一九三五・一二、岩波書店）に代表される、いわゆる文芸学派に相對する形で登場したということ。そして、近藤忠義と並び「歴史社会学派」の代表的な研究者とされる石山徹郎が、『國文學界の諸學派』（大阪府女子専門學校『國文國史』一九三七・三）の中で「あらゆる文藝現象を社會的・歴史的に見ようとするのが、この學派の特色で、その根據を史的唯物論に置き、唯物辨証法を基礎にしてゐる」と指摘するように、それがマルクス主義に拠った科学的な国文学研究方法であったということである。つまり、一九三四年には日本プロレタリア作家同盟が解散し、事実上マルクス主義文学が解体した後に、国文学研究の領域で、マルクス主義に基づく科学的な研究方法によって文学を研究しようとする人たちがいた、ということだ。

法政大学で近藤忠義、片岡良一に学んだ小田切秀雄（一九一

六―二〇〇）の戦前の古典文学論には、「歴史社会学」的な方法が垣間見られる。戦後、民主主義文学運動のオビニオン・リーダーとして積極的に活動し、共産主義・マルクス主義の理念自体の正しさを生涯信じ通して「人間の顔をした社会主義」を目指した小田切であれば、マルクス主義に基づいた「歴史社会学」的方法によって文学を研究するのも当然であるように思われる。しかし一方で、小田切には「歴史社会学」的方法に対する批判めいた言説もある。一見矛盾するようなこのあり方は、小田切自身が携わった左翼運動と転向の問題、プロレタリア文学運動に対する反省と大きくかかわっている。

本稿では、「歴史社会学」的な研究方法と、小田切秀雄とのかかわりについて若干の考察を試みる。小田切の古典文学論は主に、「歴史社会学」的な方法がより顕著であると思われる「近世抒情詩に於ける短歌の地位」（『萬葉の傳統』一九四一・一二、光書房）と「お伽草子の藝術性」（『日本近世文学の展望』一九五七・一、御茶の水書房）をとりあげる。

一、マルクス主義とのかかわり——古典文学論以前

小田切秀雄とマルクス主義の関係について述べるに当たって、まずは片岡良一が存在がある。小田切は、一九三〇年、府立高校尋常科二年の時に、偶然一年間だけ授業を担当した高等科教授片岡の国語教室で、文学の面白さを知る。そして、翌年、一五歳の年に、当時発禁となっていた小林多喜二の「一九二八年三月十五日」が掲載された雑誌「戦旗」を片岡から借り、それ

を読んで衝撃と感動で眠れなかった（『私の見た昭和の思想と文学の五十年 上』一九八八・三、集英社）と言う。言わば、文学そのものの、さらにはプロレタリア文学への小田切の開眼が片岡によってもたらされたわけだ。しかし、小田切によれば、当の片岡は、左翼運動が起こらざるを得ない状況については理解を示しながらも、現実に行われている左翼運動には批判的であり、また、「のちに歴史社会学派といわれた国文学左翼のような立場とは自分は何の関係もない」（同前）とする立場をとっていた、ということである。小田切のマルクス主義への接近は片岡に直接導かれてのものではない。あくまでも片岡はそのきっかけである。

一七歳の小田切にとつて、マルクス主義は「近代日本でまったくはじめての徹底した包括的な思想体系」「自然科学・社会科学・文化科学の全体から政治組織・文化運動にまで及ぶ実践的な世界観」として立ち現れた。自分がマルクス主義の立場に立つことは、そういう「新しい全体的な能動的な関係」「全体を通観しうる思考・思想」の中に自分を置くことを意味し、「新しい世界」に自分を引き上げることでもあった。つまり、小田切の「自我の形成」は、マルクス主義に触れることにより「包括的な思想体系」「実践的な世界観」の中で行われたのである。しかし、時代は徐々に「マルクス主義の退潮、学生運動をふくめての革命運動の全面的な敗退・解体」の時期を迎える。その中で小田切は、自身の「ふくらんだ自我意識」に行き詰まりを感じ、時代と自分との、「挫折の苦渋」においてはじめて「我が不可侵の個人としての外的および内的権威をもつものだ」

ということを自覚するようになる。一九三三年、高等科文科に進学した小田切が、学内グループのキャップを引き受けて、治安維持法違反により逮捕され、七五日間拘留後、転向、府立高校論旨退学となった事件後のことである。

わたしたちにだまって部屋を貸してくれた教授の片岡良一（中略）を、事情を知って貸したのだろう、という特高と治安維持法から守るべく拷問にたえて否認し続け、成功したが、学生運動については、カルハズミデシタ、モウイタシマセンという屈辱的な誓約をして起訴猶予をえたのだった。（中略）わたし自身の内部では学生運動についての一札でニヒリズムがはじまっていた。

〔肉眼で見た敗戦直後の文学の高揚——戦後文学の回想と検討（二）〕、「群像」一九九・一一

人間・個人・自我・われ、の問題は、その当時、まったくわたし自身の切実な「転形期の自我」の問題、この時代に自分としてどう生きるか、という自己の内部の深いところからの問題であると同時に、それとあいかわりつつ、史的唯物論、社会科学のなかで人間・個人・自我・われ、というものをどう位置づけ、どう評価し、どう機能させるかの問題であった。

〔私の見た昭和の思想と文学の五十年 上〕

革命運動の挫折・崩壊という状況下で多くの革命運動家が転

向した。それはもちろん他人事ではなく、小田切自身「カルハズミデシタ、モウイタシマセン」という一札をもって転向する。生涯にわたる小田切の基本的な要求（「社会主義的な理想主義」）〔肉眼で見た敗戦直後の文学の高揚——戦後文学の回想と検討（二）〕の裏側にずっとはりついている「ニヒリズム」が、実はこの一札によってはじまっていたのだ。転向した自我の問題、すなわち「自身の切実な「転形期の自我」の問題」は、文字どおり「この時代に自分としてどう生きるか」という「自己の内部の深いところからの問題」である。避けては通れぬこの問題を、小田切は、自分がそれまでにつかんだ思想たる「史的唯物論」の中で位置づけ——その過程では、革命運動に対する反省もふまえ——るとともに、文学の場で考えようとしたのである。そしてまた、「挫折の苦渋」故に「自我」の持つ「不可侵の個人としての外的および内的権威」というものを強く自覚する。小田切の「近代的自我」にかかわる論考も、ここからはじまっていると言える。

小田切は、転向、起訴猶予で釈放後しばらくは、家で逼塞を余儀なくされ、『日本資本主義発達史講座』全七巻（一九三二—三三、岩波書店）などを熟読。「天皇制支配下の現実の問題」を、「思想と文学の問題、民主主義と、自我と、文学においての政治主義の批判、等の問題」として受けとめ、「それらのほり下げと新たな展開」を考えるようになる。

一九三四年末からは、明治文学談話会に参加する。参加しはじめたころ、受付で「織田英雄」と署名していたが、後に本名で署名することになる。「織田の名は、わたしが警視庁の要視

察人だったということを考慮してつくったのだが、会があまり危険視されていないことがわかり、受付で本名を書くことが多くなった」(「私の見た昭和の思想と文学の五十年 上」)からである。明治文学談話会は、もともと明治文学懇談会と言い、体制批判派と目された日本近代文学研究者柳田泉・木村毅らとプロレタリア作家林房雄・秋田雨雀らによって、プロレタリア文学運動の行き詰まり打開と、明治期からの現代文学の歴史の再検討を目的としてつくられた。当初は特高が眼をつけていたが、まもなく会は明治文学談話会という開放的な近代文学研究組織に改められた。実質的な会の推進者は柳田・木村・篠田太郎・神崎清・土方定一・山室静らである。この会を通じ、小田切は山室・柳田・土方・吉野裕・清水幾太郎とその後にくく長いかかわりを持つようになる。山室とは、よく知られているように、戦後の「近代文学」にまで続く長いかかわりがあり、山室の「文学史的研究以前のこと」(「明治文学研究」一九三五・一〇)は、小田切が戦後加わった上部構造論争に通じるものである。吉野裕は、小田切の第一評論集『萬葉の傳統』出版のきっかけをつくってくれた人物である。また、清水の著作を手がかりとして、小田切は「史的唯物論Ⅱ社会科学」の中で「人間・個人・自我・われ」というものを検討しようとする。

逮捕、転向という大きな転機を経ながら、小田切は、いくつかの書物や明治文学談話会などを通じて、マルクス主義と「人間・個人・自我・われ」というもののかかわりを、文学という場でより深めようとしていることがわかる。

二、古典文学論隆盛の時代背景

一九三五年九月、約二年間にわたった「浪々生活」に終止符を打ち、小田切秀雄は法政大学予科に編入学することになる。入学に際し、「わたしは、今後学生運動に参加するつもりはなく、文学研究に専念します」(「私の見た昭和の思想と文学の五十年 上」)という旨の誓約書を書き、井本健作予科長(作家青木健作)に提出して入学を許可された。戦中の抑圧体制下で、左翼運動歴のある者の思想・行動がどこまでも束縛されることを物語るエピソードである。

片岡良一は、一九三三年小田切逮捕の際、自分の部屋を小田切たち学生に貸していたということで警察に呼び出されて訊問を受け、それにより、府立高校教授の職を退くばかりか、実践女子専門学校講師としての職も失うことになった。一九三四年、そんな片岡を法政大学教授として迎えたのが、当時の文学部国文科主任教授近藤忠義であった。こうして、小田切は、近藤忠義、片岡良一のいる法政大学で文学を学ぶことになる。小田切が古典文学を学ぶ環境は既にととのっていたと言える。

わたしの専攻は近代文学であるが、はじめは近世文学の勉強にエネルギーを傾けた。中学時代からのわたしの先生である片岡良一が『井原西鶴』(至文堂刊)をもつて出発したひとであったことの影響もあるし、大学に入ったときの主任教授が近藤忠義でその指導を受けた(いまも受けているが)と

いうこともあって、在学中から近世文学についての論文をいくつか発表し、卒業後も最近にいたるまで近世文学を論ずることをやめていない。

〔後記〕、『日本近世文学の展望』一九五七・一、御茶の水書房

近藤忠義が近世文学の専門であることはよく知られている。

一方、近代文学研究者として知られる片岡良一だが、その出発点は西鶴研究にあった。片岡の東京帝国大学文学部卒業論文は「人及び芸術家としての井原西鶴」（一九二五）であり、また、最初の単行本は『井原西鶴』（一九二六・三、至文堂）であった。彼らの影響もあり、小田切は古典文学、特に近世文学を学ぶことにエネルギーを傾ける。実際、小田切が最初に書いた古典文学論は、「芭蕉に於ける旅の意義」（『艸くさ』一九三九・一、筆者未見）を除くと、『浮世風呂』論―その寫實と笑ひ―（『古典研究』一九三九・三）であり、これに続く三本の古典文学論（『慶長見聞集』の文學的側面）、『類聚の一形態―「膝栗毛」論（上）―』、『お伽草子の藝術性』はいずれも近世文学を対象としたものである。近世文学以外を対象とした小田切の最初の古典文学論は『源實朝の藝術』（『古典研究』一九三九・九）であるが、『二』章に改稿がなされた後に、『萬葉の傳統』（一九四一・一二、光書房）に収められることになる。

と見てくると、大学での研究環境がいかに小田切に古典文学論を書かせたように思えるが、小田切が古典文学論を書くにいたる背景にあるものはそれだけではない。小田切が近世文学

論と併せ、後に『萬葉の傳統』に収められる古典文学論を執筆していく背景には、当時の古典文学研究の状況が大きくかわっている。

戦争中の日本の体制がわが奉じた強制した超国家主義・天皇主義・伝統主義（というより伝統拝跪主義）のゆえに、もともと「国学」系または神道系の多かった日本文学研究者は、戦争下に優遇され、おし出され、なかにはわが世の春が来たようにふるまう手合いまでがあった。古典概念が戦争下の御時勢向きに再編されて古典とは古き典・則、服従すべく拝跪すべきものとされ（久松潜一の古典論、さらには保田与重郎のそれ）、「神典」たる『古事記』・『日本書紀』等の記述には、そのまま現在の国民が服従すべきものとされた。『源氏物語』や『大鏡』等での、あるがままの天皇に多少とも立入った記述はすべておしくされ、文学史はたとえば、近世文学については西鶴時代以降の戯作文学のすべておよび近松時代以降の浄瑠璃・歌舞伎のすべてつまり民衆文学のすべてを黙殺し、もっぱら「国学」とその諸系統を中心に編成され、蕉門以降の俳諧関係だけがわずかにみとめられる、というすさまじい状況がつけられた。

（私の見た昭和の思想と文学の五十年 上）

ここでも名前の挙がっている保田與重郎を引き合いに出し、後年小田切は、自著『萬葉の傳統』について「古典をダシに使って、というものでもあったが、古典にたいして同じころの保田

与重郎がとっていたような浪漫的・恣意的なやり方には承服できず、客観的な評価を試みようとし、また実証的・資料的な文学史的研究という面をふくんでいた」(この本のこと——悔恨と回想——)『民主主義文学論/小田切秀雄著作集第二巻』所収、一九七二・四、法政大学出版局)と語っている。小田切だけに限らず、「近代文学」派の人々の、保田與重郎及び「日本浪漫派」批判に不十分な点があることは、橋川文三が既に『日本浪漫派批判序説』(一九六〇・二、未来社)で指摘しているが、当時の国文学研究が、「超国家主義・天皇主義・伝統拝跪主義」に従属する形でなされ、対象とする古典作品がある程度限定されるという状況にあったことは確かであろう。だが、小田切の古典文学論には、当時の古典文学研究に対する批判が込められているのだ。

三、古典文学論発表誌とペン・ネーム——戦時下のあり方

戦前の古典文学論及び古典文学に関する文章(書評、時評)は、いくつかの雑誌にある程度集中し、小田切秀雄という本名以外の、さまざまなペン・ネームによって書かれている。

主立った発表誌を挙げると、「日本短歌」(一九三二・一〇)・一九五四・一〇)、「南画鑑賞」(南画鑑賞会、一九三五・一・一九四四・二)、「古典研究」(雄山閣、一九三六・一〇)・一九四二・五)がある。ここでは、小田切の古典文学論の多くが発表された「古典研究」について触れておく。「古典研究」創刊号(一九三六・一〇)の「生誕言」では、「国民文化の成果」

である「古典文献」を「大衆のともに享受すべき」ものとし、「従来、國民と隔離された古典を國民全體の手に還し、國家理念を確立し現代の指導精神を樹立する」ことが雑誌の「使命」であると謳っている。さらに、創刊号の特集は「古事記と讀史餘論」であり、これらを鑑みると、「古典研究」は、古典文学を戦時下の時世向きに再編するための、国威発揚の一端を担う雑誌としてつくられたと言いうことができる。確かにそうした意味合いも多分にあっただろうが、実際には、毎号に特集企画をもうけ、それとあわせた別冊付録「雄山閣文庫」を付した、古典文学啓蒙的な雑誌であった。国威発揚のためだけの雑誌でないことはまた、編集に携わっていた者の顔ぶれを見ても言えることだ。「古典研究」に小田切が最初に書いた古典文学論は「浮世風呂」論——その寫實と笑ひ——(一九三九・三)である。その時に編集に当たっていた金川太郎とは、林基(小田切と一緒に府立高校を退学)の紹介によって出会う。金川が編集を降りてからは、小田切が佐藤進(小田切が府立高校退学の翌年、学生運動のため同じく府立高校を退学)を編集者に担ぎ出し、共に編集に携わることになる。特に、一九四〇年二月には、小田切が編集の中心となって「国文学に於ける世界観」という特集号をつくり、近藤忠義ら「歴史社会学派」をはじめとして、軍国主義・日本主義という時流に屈しない国文学者の論考を掲載する。つまり、左翼運動にかわりのある、あるいはかつてかわりがあった者によって編集された、必ずしも時流に沿うわけではない、自由な雑誌だったのである。これはまた、一九四〇年前後の雑誌「日本短歌」の編集者が、昭和初年のプロレタ

リア短歌運動の中心を担った歌人渡辺順三であること、雑誌「面鑑賞」の編集に平野謙が携わっていたことなども共通する。

ペン・ネームについて言えば、織田英雄、篠塚正（荒正人・佐々木基一との共同筆名）、奥田暁、杉田二郎、篠原三郎、奥山徹郎、東條健などを挙げることができる。「浮世風呂」論——その寫實と笑ひ——発表後、「この論文がわるくなかったとみて、その後はほとんど毎月この雑誌に書くこと」になる。その翌月、「慶長見聞集」の文學的側面」（『古典研究』一九三九・四）を奥田暁のペン・ネームで書いた小田切は、「毎号同じ筆者が続くのはおかしい、ということであつた」とペン・ネームをつくることになるのだ。もちろん、数々のペン・ネームは、それだけによるのではなく、既に触れたことだが、織田英雄の名が、「警視庁の要視察人」であつたことを考慮してつくつた名であるように、時局と自身の置かれた立場というものを意識してのものである。

小田切は第一評論集『萬葉の傳統』について、「戦争下の出発」（『群像』一九六七・三）の中で、「古代から現代までの日本詩歌の傳統の中心」として主に「萬葉の傳統」をたどりつつ、「当時の軍国主義的・超国家主義的な文學傳統論」への「抵抗の意志を示す」意図で「人間性の現実とその理想との追及」に「固執」したのだと言う。また、『私の見た昭和の思想と文學の五十年 上』の中では、「表現をやわらげまたは抽象的にするくふう」を施し、「刊行まぎわになつて出版社がわからの要望に従ひ扉裏に、この書を前線にある兵士たちに贈る」というカクレミノ的なことを掲げました」と述べている。

表面的には御用文學的なもののように見せかけ、その裏側では時局への激しい「抵抗の意志を示す」。こうした「面從腹背」のあり方は、先に述べた、古典文學論発表誌、特に「古典研究」の性格、そして数多くのペン・ネームの問題とも、実はかかわってくるのである。

四、古典文學論に見られる「歴史社会学」的方法

『萬葉の傳統』所収の古典文學論の中で、「歴史社会学」的な方法がより顯著であると思われる「近世抒情詩に於ける短歌の地位」（初出「古典研究」二九四・三・四）、特にその中の「一章から三章をとりあげる。この論文は、『萬葉の傳統』収録の際、表現、改行位置などの改稿が施されるが、全体的な内容、論旨が大きく変わるところはない。

「近世短歌を近世の抒情詩全體の中に位置せしめてその詩的達成の内容を検討する」ことが、この論文の目的である。それを明らかにするために、小田切秀雄は最初に、「抒情詩が相當程度にまで獨立した個人の人格を前提とする藝術」であり「共同體的關係、又は政治的壓力による個人の人格の埋没の状態の中では到底生み出され得ない藝術である」と定義づけ、その上で「一般に近世社會の現實の條件は、抒情詩の豊富な開花・結實にとつて好適な地盤であつたかどうか」と問題提起する。そして、『萬葉集』の創造された時代の現実的な人間条件との比較によつて、考えてゆこうとする。

この問題提起のあり方、考え方が、極めて「歴史社会学」的

である。抒情詩、つまり文学作品を、その地盤となる社会、作者たる個人が置かれた社会の現実からとらえる。それも、時代、歴史の流れの中で、とらえようとするのである。

小田切によれば、『万葉集』の時代は、「氏族制度の紐帯が漸くゆるみ」、「氏族制度の一員に過ぎなかつたところの人々が國家の一員としての新しい運命の中に入り込みはじめる時代」である。「國家の一員たることによつて獨立の經濟と責任とに生きるやうになつた事態は、また人格と更に自由とを自ら形成せしめる方向に向ひ、從來は全く意識されることのなかつた個人的運命への自覺も始めてここに呼び覺されることとなる」。

さらに、「此の新しい世界は新しいパトスと呼び」、「各個人個人のバトス」は「萬人の共感」を得るようになる。そして、「獨立したばかりの人間のみづみづしい清純素朴な激情はなほ時代を超えて現代の私達の感情にも直線的にしかもふかぶかと響いて来るもの」をもつようになるのである。簡単に要約するならば、地盤たる社会の現実の変化が個人を誕生させ、その個人の感情表現が万人の共感を得ることによって、文学作品として定着するようになるということである。極めて發展史觀的なとらえ方である。こうして、『万葉集』の時代は「抒情詩の豊富な開花・結實にとつて好適な地盤」であると結論づけられる。

それに対して、近世社会は身分社会であるために、「獨立した人格の存在・發展を保證するものでなく、かへつて人格を政治的力のもとに埋没せしめ」、「近世の現實が個人の獨立——自立的な人格——意志と行爲の自由」を「制約」していた。したがつて、「近世に於ては、抒情詩はその豊かな開花・結實のための

必要缺くべからざる前提となるものを、まづ有してゐなかつた」ということになるのである。

以上、「近世抒情詩に於ける短歌の地位」の「二章から「三」章を簡單に見てきたが、歴史的、社会的条件、地盤の中で、個人（自立的な人格）の問題、文学作品をとらえようとする、「歴史社会学」的方法による分析である。

次に、『日本近世文學の展望』所収の古典文學論として、「お伽草子の藝術性」（初出「古典研究」一九三九・六、筆名・杉田二郎）をとりあげる。なお、この論文は、『日本近世文學の展望』収録の六年前に、「中世末期民衆文學の一つの場合——お伽草子の藝術性——」（岩波書店「文學」一九四八・九）とタイトルを改め、全面的に大幅な改稿が施される。この改稿版がそのまま『日本近世文學の展望』に収められる。改稿の問題については次章で述べる。

この論文はタイトルどおり、「お伽草子の藝術性」を問う。小田切はまず、先行研究が「お伽草子」を「過渡的姿態」であるにとらえ、「お伽草子の藝術性の稀薄なることを斷定」していることをふまえて、この「一般的斷定を以てしては必しも覆ひ切ることの出来ぬ二三の傑出した作品、また右の斷定の内容を何らかの形でより限定づけるに役立つやうな作品それらを具體的な個々の作品に當つて審査する」と述べる。そして、「文正草子」「福富草子」「のせざる草子」「魚鳥平家」「さざれいし」「三人法師」などの作品を分析していく。

「文正草子」では、「室町期の産業のうち特に重要な鹽燒きが扱はれてゐること」すなわち「當時の製鹽業の形態の片鱗がチ

ラリと顔を出してゐること」や、「商人が主として行商人であつた當時の物賣りの賣り方の若干を反映してゐる」こと、「動搖してゐた時代であつただけに、庶民にして婿に大宮司の公達や大名達を期待するさま」が見出されること、に小田切は注目する。そして、これらは「史學の資料の斷片としてのみ意味をもつのではな」く、「作品の中に以上のやうな部分が見出されることはそれだけ作品の世界を新しい現實に接近させてゐることが重要なのである」と述べる。一方、こうした「新しい時代への傾斜」とはむしろ反對の方向への傾斜」も見られるとし、表現・内容いづれにおいても「類型的な表現や王朝的なものの考へ方、感じ方の模倣と思はれるものがたくさんある」と言う。先行研究に見られた「作品の過渡性」を自ら確認するのみならず、その上に立つて、「お伽草子」では、このような「矛盾」が「いろいろの形をとつて存在し、作品の藝術性にぬきさしならぬ制限を加へてゐる」とするのである。なお、「福富草子」に見られる「作品の過渡性」として、「人間を残酷に取扱ふ古い態度」と「日常生活的なもの、庶民的な現實生活への關心のあらはれ」すなわち「日常的現實的なものの尊重」との「矛盾」を小田切は指摘する。「文正草子」についてはほかに、「發展しつつある庶民の健康な生活の何らかの反映」が見出されるとし、「比較的すぐれてゐる」作品であると見なす。

以上、「お伽草子の藝術性」についても、「お伽草子」の各作品の中に、時代や社会の「新しい現實」、例えば「發展しつつある庶民の健康な生活」などの反映を読みとり、「お伽草子」を文学史の中で「過渡的」形態としてとらえている点で、「歴

史社会学」的な分析の方法に拠つた古典文学論であると言える。それはまた、「作品の世界を新しい現實に接近」「新しい時代への傾斜」「生活の何らかの反映」といった表現だけを見ても、明らかである。

五、「歴史社会学」的方法との距離

小田切秀雄は「最近に於ける西鶴研究の達成——近藤忠義氏新著『西鶴』について——」（『古典研究』一九三九・八、筆名・奥田瞭）の中で、近藤忠義著『西鶴』（日本評論社、一九三九・五）について、その研究の意義を十分に認めた上で、「進歩的な側面が強調され過ぎてはゐないだらうか」と言い、「歴史の發展が進歩的な側面だけの發展に限定されて考へられる傾きがあるとすれば、それは危険を招きやすい」とした上で、その理由を次のように述べる。

何故なら、全體としての歴史は、進歩的な側面とそれに反對の側面との交渉し合ふ全體であり、また進歩的な側面は純粹に常に進歩的ではあり得ずに、自己のうちに進歩的なものとその反對のものとのからみ合ひをもちながら究極に於ては進歩的であるといふのが歴史の眞實だからである。

近藤の『西鶴』における進歩主義的歴史観の問題点を指摘したもののだが、これは決してマルクス主義そのものに対する批判ではないだろう。歴史を唯物弁証法的にとらえているという意

味で言えば、「歴史社会学」的なあり方を、小田切なりにさらに掘り下げていとも言える。前章で触れた「お伽草子の藝術性」は、まさに「進歩的なもの」と「その反対のもの」との「からみ合ひ」という「全體としての歴史」において、作品を分析したものであった。また、近藤の『西鶴』では「芭蕉の蕉風抒情詩の完成への道が全然問題にされ」ていないことを指摘しているが、小田切自身は「近世抒情詩に於ける短歌の地位」の中で「抒情詩の完成への道」を分析していたのである。

当時の「歴史社会学」的方法の問題点とは、科学的な文学把握に努めたがために、主観的な鑑賞を失ってしまった、ということである。小田切は「国文学時評(一)」(「古典研究」一九三九・一〇、筆名・織田英雄)において、「日本文芸学に對立して、これを批判しつつ科学的な文芸理論の体系を新らしく打ちたてて行こうとした所謂社会学派(歴史学派とも言われた)」が、「芸術性を、主観的な鑑賞の単なる対象に過ぎぬものとして排斥するの極端さに越ってしまった」と述べている。

廣末保は「日本文学研究の回顧と展望」戦後を中心として——(日本文学協會編『日本文学研究法』東京大學出版會、一九五五・二)の中で、戦後の日本文学研究は戦時下の「人間性喪失、文学喪失、科学喪失のうえにつくりあげられつつあった國文学の傳統」から解放されたいという要求から始まったと言いい、その主要な支柱となったのが、「社會の發展を唯物史観的な合法則性によって解釋」し「文學の展開を歴史社會的な現實に結びつけ、その歴史社會的な發展の方向に文學の發展をもみよう」とした「歴史社會學派」であったと述べ、その歴史的

意義を説いている。一方、「歴史社會學派」の「良心と進歩性」が「國民から孤立」していたこと、その結果として彼らの「良心と科学」が「民衆のもつ社會的・精神的苦惱に對してもある程度無力である」ことを、問題点として指摘している。小田切自身は、「歴史社会学派」の問題点としてだけ限定するのでなく、民衆の立場と文学者の立場の間に懸隔があったことを戦後すぐに「新文学創造の主体——新しい段階のために——」(「新日本文学」一九四六・六)の中で述べている。

これらの問題点が、小田切の「歴史社会学派」理解には含まれていたのである。だからこそ、小田切は「歴史社会学派」と自らの文学研究・文学批評の間にある種の距離を置いたのではないだろうか。

「お伽草子の藝術性」の改稿版である「中世末期民衆文學の一つの場合——お伽草子の藝術性——」(一九四八)において小田切は、作者に人間を凝視しようとする姿勢があるか否か、を問題視する。言い換えれば小田切の視線そのものが民衆に注がれ、人間の運命の凝視へと向かうのだ。この姿勢が「三人法師」の作者の眼差しを、「人間の肉奥にひそめられた恐ろしさとみじめな生活とをじっと見つめる沈んだ眼」と評するところにもあらわれている。改稿前の「人間の運命を諦視しようとする態度」が、「人間の運命を凝視しようとする態度」と書き改められているのもつとである。

つまり、小田切秀雄の古典文学論は、「歴史社会学」的方法に拠りながら、その問題点を克服しようとする意図によって書かれたと言えるのである。そして、その延長線上に立って、

小田切が戦後すぐに取り組んだのが自我・主体性の問題であった。これらは、政治への従属、自我喪失といった戦前のプロレタリア文学に対する反省、マルクス主義の正しさを信じながら転向しなければならなかった挫折と苦渋、そして自身のニヒリズムを克服せんとするところから来ているのではないか。「新しい作家的な主体の形成」(「主体の恢復——現代文学問題——」、「新生」一九四六・八)を「現在の文学の中心問題」(同前)とするとともに、文学作品を読む主体の確立についても述べている(「文学鑑賞の仕方——文学を読むとはどういうことか——」、「新文化の情熱と感覚」所収、九州評論社、一九四七・五)。さらに、文学作品の「科学的な研究方法」があることを認める一方、「その科学的操作の適用」が、「自分の全身をかけて」作品に「立向いながら同時に常に自己を吟味し自己とたたかう」という態度によって支えられていなければならない(同前)、と言うのである。マルクス主義、科学的な文芸理論に拠りながらも、自らの主観、実感に基づいて作品と自身に対峙する。これこそが、「歴史社会学」的でありながら、その枠組みには収まらない小田切秀雄のあり方なのである。

(了)

※引用文中の旧漢字の一部を新漢字に改めた。

※「お伽草子の藝術性」「中世末期民衆文学の一つの場合——お伽草子の藝術性——」「最近に於ける西鶴研究の達成——近藤忠義氏新著「西鶴」について——」「肉眼で見た敗戦直後の文学の高揚——

戦後文学の回想と検討(二)の引用はいずれも初出誌に、「近世抒情詩に於ける短歌の地位」の引用は『萬葉の傳統』(光書房)に拠った。これらと『私の見た昭和の思想と文学の五十年 上』『民主主義文学論／小田切秀雄著作集第二巻』以外の小田切秀雄の文章の引用は、『小田切秀雄全集』(勉誠出版、二〇〇〇・一一)に拠った。

※本稿は、歴史社会学派研究会での口頭発表をもとに、参加者のさまざまな意見をふまえて書いたものである。

(やまなか ひでき・一九九二年度修士課程修了)